



株式会社大本組  
東京港出張所 所長

中村 誉之 さん

なかむら たかゆき

1992年日本大学工学部土木工学科卒、  
大本組入社。多くの陸上・港湾の現場、積算  
業務に従事後、2022年から現職。神奈川  
県出身 56歳。

# あの頃、 思い出の現場

「平成11年度常陸那珂港北防波堤本体工事」

## 初の監理技術者として 「出来栄」に 向き合う

入社してから約30年間、現場業務に従事してきました。その中で特に思い出に残っているのが、29歳の時に監理技術者として初めて携わった「平成11年度常陸那珂港北防波堤本体工事」です。運輸省（現国土交通省）が工事を発注し、現在の茨城港常

陸那珂港区の北防波堤用に重量2,000tのケーソンを4函製作するものでした。それまで経験のなかった大きな構造物を扱うこともあり、品質や出来栄に対して真剣に向き合いました。以後に全国の港湾工事現場に赴く最初の工事でもありました。

現場では、当社職員3人で施工に当たりました。上司の所長の指導もあり、監理技術者として発注者のもとに足を運ぶことを心掛けました。監督員などと直接話す機会が増えましたが、経験や知識の不足を痛感することも多く、設計図書、標準仕様書、コンクリート標準示方書を読み込むなど勉

強して臨みました。監督員から言われたことに即答できない時は、事務所に帰って再度勉強して対応するようにしました。

ケーソン1函の規模は、長さ20m×幅13m×高さ14.5mです。ケーソンヤードで鉄筋、型枠を組んでコンクリートを打設する工程を5回繰り返す作業を、2函同時に進めました。ヤード内の隣接工事のコンクリート面の仕上がりを常に意識しながら取り組みました。型枠を良好な状態に保てるよう、清掃や剥離剤の適切な使用を徹底し、バイブレーターの締め固め管理、打ち継ぎ時間の管理など品質に関わる知識を積極的に習得するよう努めました。

生コン打設中は常に立ち会い、自らもバイブレーターを操作するほか、型枠内に入って生コンが端部まで行き渡っているかを確認しました。現場の職人は、常陸那珂港でのケーソン製作に携わってきた熟練の人も多く、要点を教えてもらうなどして、より良い施工を目指しました。

4函のうち2函のケーソン製作では、当社が当時開発した「リフトアップ工法」で施工しました。型枠ブロックとタワーブロックを交互に上昇させながら、ケーソンを1ロットずつ構築する工法です。1ロットごとの型枠と作業足場の設置・撤去工程が不要となり、クレーン作業が削減されますので、安全性と施工性が向上するというメリットがあります。

導入は3事例目でしたが、予期せぬ機械トラブルなども発生し、工程を守るために日が暮れてから、照明を付けて機械の整備を行うなど、苦勞したことを今でも覚えています。現場には工法の開発担当者も常駐し、対応に当たってもらいましたが、監理技術者として発注者にしっかりと説明する必要がありました。

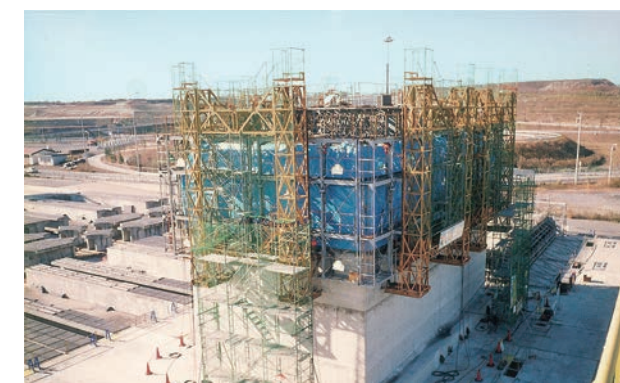


ケーソンヤードでの施工状況

苦勞が多かったものの、比較的早く当社単独施工の監理技術者を経験できたことは恵まれていたと思います。発注者と直接話す機会も増えますし、工事全体を考えながら施工管理することで仕事の面白さを実感するようになりました。その後、東北の震災復興、羽田空港D滑走路、離島の防波堤や都内の内部護岸など、全国の港湾工事に従事してきました。現場の所長として予算管理を含めた業務も覚えるようになると、責任を伴いながらも、自分の判断で現場を動かすことで、ますます仕事が面白くなっていきました。

今は、港湾現場の施工支援や入札時の積算支援を行いながら、当社が加盟する協会の活動に参加することで、さらに視野が広がっています。若い人たちに指導を行う場面では、自分の経験も踏まえ、与えられた仕事だけで満足せず、1日でも早く「現場全体の業務」を覚えてほしいと伝えています。そうすることで仕事のペース配分も理解でき、主体的に業務に取り組めるようになるからです。

当時、現場でやり取りした発注者側の方と昨年、ある懇親会で二十数年ぶりにお目に掛かりました。同世代であるその方は当社が当時、常陸那珂港で新しい技術の導入などに挑戦していたことを覚えて下さっていて、しばしの時間、昔話に花を咲かせました。現場運営は発注者や近隣住民、協力業者との円滑なコミュニケーションが不可欠です。近年、生産性向上へICT施工、BIM/CIM、AIなどの技術を積極的に活用していますが、現場では「人の存在は今後も欠かせない」と強く感じています。今後は、先端技術に頼る部分と人が担うべき部分を見極め、状況に応じて使い分けことが、『より良い現場運営』と『生産性の向上の鍵』になると考えています。



「リフトアップ工法」によるケーソン製作